神長倉史学再考

馬場　宏二

取り上ぐべきべき主題はいくつかあるが、全く新たに書き下ろすには、体調と時間に余裕がない。そこで、いささか横着をして、未発表の既成諸稿中の一つに少し手を入れ、読者の御検討を受ける機会を得たいと思う。

神長倉真民の歴史書三冊を改めて通読した。三年ほど前、人物探索[1]を試みたころには著作一通りに目を通していたが、机上で精読したのは初めてである。北浦和図書館松本司書のご尽力で『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』が熟読可能になり、三浦基弘氏のおかげで『明治産業発生史』と『明治維新財政経済史考』も入手できた。読書条件が良くなっただけではない。出発が『会社という言葉』[2]だったから、関心が会社や商社なる語の出現に限定され勝ちだったが、今回は神長倉が描こうとした歴史の全体的構図に留意し、併せて学界歴史家の神長倉真民への注目にもヨリ細かく注意した。その結果『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』は斬新な幕末史の構図を示しており、神長倉の大きな貢献である、商社構想に関する川勝家文書と6百万ドル借款に関する岸川家文書の剔出は、この構図が誘発し、かつ構図自体を強化するものだったことが見えてきた。歴史学のシロウトとしていささか傲慢に放言するが、この貢献に対する学界歴史家の評価は決して充分ではない。

1. 神長倉歴史学の視角

以下主として、神長倉最初の歴史書『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』を取り上げる。同書の内容は、「芋作」筆「維新経済史抜読み」と、韜晦した筆名・表題で『ダイヤモンド』1933年1月から1935年まで連載した「中間読物」を纏めて書き直したものだが、書物とした際に付した「緒言」に著者の視角が述べられている。

まず、「本稿は、幕末の御勘定奉行小栗上野介を中心として、幕府末年の経済政策を語り、明治新政府初代の大蔵大臣ともいふべき三岡八郎…後の由利公正を中心として、明治新政府の経済政策を語るといふプランになっている…」。財政を中心とした時代把握は斬新である。それまで歴史は、政治史・戦争史か、主役の人物史だった。経済史となると、神長倉と同時代の日本資本主義論争に由来する、農業、諸企業、労資関係等専ら内向きの基礎過程分析だった。財政史自体は皆無ではないが、この、権力と直接対応する経済過程を軸とする歴史叙述は、新たな視角の提示である。

因にここに宣言された神長倉のプランはほぼ実現した。前段は本書として、後段は神長倉が「序文」まで書きながら終に書として手にすることがなかった『明治維新財政経済史考』として。と

はいえ、ここに多少の留保が要ること後に触れるごとくである。

ついで神長倉は言う。「小栗の事蹟を研究して行くと小栗の背後に、当時の仏蘭西公使レオン・ロッシュ…通称ロセスというものが頑張ってゐて、小栗を縦横に操ってゐることを発見した。そこでまづこの傀儡師から片づけて行こうとして…何時の間にか本書を成した」と。関心が維新史→幕末財政史→担当者小栗上野介→傀儡師ロッシュと絞られたわけだが、この把握にどこまで先行説があったか寡聞にして知らない。神長倉の文体が学術論文風でないので、先行研究のどの説に影響されているのかも判らない。ロッシュが幕府の政策に影響した事実は、先行幕末史の中で大まかには述べられている[(3)]が、神長倉のように、それに焦点を合わせて関連史料を発掘しつつ幕末史を論じた例があったろうか。幕仏関係に焦点を合わせた同時期の学界歴史家といえば、管見の限りでは大塚武松 (1878 ～ 1946) だが、大塚は仏語文献利用では神長倉より上でも、ロッシュ献策による幕府の自己改革を神長倉並みに深刻に捉えてはいなかったように思われる[(4)]。この大塚を意識的に追ったのが石井孝 (1909 ～ 1996) だが、石井の博捜緻密は高く評価されるものの、後述のように、史実提示では神長倉が先行しており、にも拘らず石井は、神長倉を先行業績として認知することなく、その名を挙げたのは専ら否定的批評を浴びせるためだった。

さらに神長倉は言う。「本書では幕府とロセス…小栗上野介とロセスの関係を説くことが主になって、小栗の経済政策といふやうなものはまだ現はれてゐない。併し予算二百四十万弗の横須賀製鐵所の取建、六百万弗の対仏借款問題等は、従来発表されてゐるものよりは、多少掘り下げられてゐる筈だ」。これで、本書が『ダイヤモンド』の中間読物以来の、横町の物知り隠居が八つあん熊さん相手に講談調で幕末史を語る文体で述べられているにも拘らず、これまでの学界歴史家を越える新説提示だという著者の気負いが伺える。

「緒言」の最後に言う。本書は伯爵モンブランといふ怪人物を登場させないと纏まりがつかないのだが頁数の都合で割愛した。「これは他の反幕派の外人トーマス・グラバやアメリカ彦等と一緒にし、本書の第二巻として、この秋頃出版する予定だ。…この方では従来、歴史家によって殆ど閑却されてゐた、巴里、ブラッセル、ロンドンに亘って張られた、薩摩の幕府打倒戦線の全貌が明かにされる筈だ」と。モンブランが薩摩の手先として働き、幕府を不利に陥れたことは、同書第四巻末尾等で僅かに触れてあるが、後は晩年に『経済マガジン』にそれらしい文章を二三載せたに過ぎず、本格的分析たる第二巻は結局出版されなかった。理由は全く不明である。『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』が刊行された時点で、神長倉はすでに糖尿病を患っていたが、それでも旬刊の『ダイヤモンド』に、連載の中間読物の他に、社内報やコラムや、それに蜷川新や長谷川伸との論争を掲載するほど筆力は充実していた。本文中で時々言及し、緒言でわざわざ予告した第Ⅱ巻がなぜ出なかったのだろうか。適切な史料が充分整わなかったのだろうか。あるいは『ダイヤモンド』に「明治開化史」の連載を初めたらそちらに関心が移り、結局『明治産業発生史』を刊行するに至ったために、第二巻執筆の興味が失せてしまったのだろうか？『明治産業発生史』は、銀行・会社の起源を探った先駆的な歴史解明を含み、今日なお参照さるべき労作だが、消え失せた第二巻は、勝てば官軍史観への強力な消毒薬になり得たはずと思われる。

2. 神長倉幕末史概要

ここで対象とする『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』は「…の巻」の積み重ねで書かれている。便宜上第一巻、第二巻…と表示すれば、第一巻「小栗上野介の巻」、第二巻「ロセスとカションの巻」、第三巻「横須賀製鐵所の巻」、第四巻「三兵伝習の巻」、第五巻「六百万弗借款の巻」、第六巻「ロセスとパークスの巻」、第七巻「六局取建の巻」、第八巻「ロセスと慶喜の巻」、第九巻「カションとシーボルトの巻」。この構成は、ほぼ時代を追いながら、ロッシュ(幕府名ロセス―魯節)が幕府の信頼を得、終には将軍慶喜を直接動かして幕藩体制を幕府を中心とする中央集権国家に自己改造させるべく方向付け、結局それはフランス自身の対外政策の変更によって不成功に終わったとは言え、かなりの程度実現可能な域にまで持って行ったという筋書きを示す。

筋書き自体魅力的だが、大筋を繋ぐ人物描写や挿話も魅力に富む。冒頭、鳥羽伏見の戦いの日に雪を伴った強風が京都の方角から吹き、ために強力な幕府軍も勝てなかった、ナポレオンのワーテルロー同様、勝てそうな側が天意で敗れた不思議な出来事だと言う。そこから直ぐ、この維新で気の毒なのは「一朝にして朝敵の汚名を着せられた徳川方の人々だ」と、足早に主題の小栗上野介を持ち出す。幕府が敗れたのは将軍慶喜が味方を騙して大阪城から逃げ出したためで、小栗は幕末の数年間、勘定奉行勝手方として苦しい財政を一手に引受けていたのに、江戸城会議で迎撃を主張して将軍お直の罷免を蒙り、上州権田村に隠棲して結局官軍に首を斬られた。維新の変革では、直接戦った松平肥後守や榎本武揚ですら死を赦されたのに、戦場外で斬られた幕府の大官は小栗一人である。

もう一つ逸し得ないのが小栗の埋蔵金。この有名な風説は長く信じられ、今日でも赤城山を掘っている人がいるそうだが、神長倉は埋蔵金などあり得ないと一笑に付す。その論拠が鮮やかで、「嘘か本当か知らないが、小栗は権田村へ引っ越す時に、不要になった千両箱に家財をつめて持って行ったのが誤解されたとも言うが」そもそも当時は、馬の背に千両箱二つだから、百万両運ぶとすれば馬5百頭が要る。お直の罷免で謹慎中の小栗が、そんな多くの馬を使って軍用金を持ち出すなどあり得ない。「何より幕府にはそんな金は残っていなかった」。搬出不能説は、熱狂的な小栗弁護派でも思い着かなかった弁明だが、神長倉は特別な史料もなしに、論理と常識で軽々と言ってのけたのである。

この「小栗上野介の巻」には、薩摩藩邸砲撃の戦略は小栗の発案と言われるが、フランスから招かれた砲兵大尉ブリューネの案だろう、延いては小栗の発案だとされ、大村益次郎を戦慄させたと伝えられる討幕軍迎撃作戦も、多分フランス将校の案だろうとの推察が挿入され、さらに、幕末の出費は膨大なものだったが、幕府の財政資料は全く残っていないと言う。「嘘か本当か知らないが、幕府瓦解の時、さういふ書類は本所の御竹蔵へもって行って焼いてしまったといはれている」と。因に御竹蔵は現在の国技館一帯。資料を焼いたと言う論拠は、三田村鳶魚『江戸生活のうらおもて』[5]である。因になお、神長倉は「小栗といふ人もよほど筆無精な人だったと見えて、日記あるいは覚書きといふやうなものを残していない」と書いているが、これは無理もない誤りで、1935年の時点では、小栗の日記は家計簿とともに群馬県渋川町に秘匿され(後藤家

文書）ており、戦後発掘されて、『群馬県史』の付録として活字になった。原文は、極めて達筆で書かれた簡潔几帳面な記録で毎日律儀に書かれている。小栗の訪米記が全く残っていないのも同様な一斬首時に官軍による意図的な破壊を蒙った一理由によるものと推測出来る。

以下、挿話は割愛する。第二巻『ロセスとカションの巻』は、元治元(1864)年着任したフランス公使レオン・ロッシュが、横浜在住英人140人に対して仏人20人といった劣勢から発して、慶応四(1868)年には、勝海舟が日記に「フランスの信がなければ幕府内では要路に立てない」と憤懣を述べるほど強力な地位を幕府内で築いた経緯を描いている。

ロッシュは来日時に、神父メルメ・ド・カション（幕府名一和春）を通訳に得た。カションは日仏英対訳の辞書を編集したばかりか、アイヌ語彙収集まで行なった語学の達人だったが、函館で布教をしていた時期に、奥医師の分際で洋船を乗見したのが反禁だとの口実で函館に流されていた栗本鋤雲から日本語を学び、交換に海外事情を伝えた（栗本『鉛筆紀文』）仲だった。栗本は江戸に呼び戻され、外国奉行として外交の場に現れ、カションと再会した。鋤雲については神長倉が結構詳しく述べているが、やがて本格的な著書が現れるであろう[(6)]。神長倉は明示していないが、鋤雲は少年時代から小栗忠順と親友だった。

こうしてロッシュは、カション→鋤雲→小栗上野介と偶然に連なった人脈に恵まれ、ナポレオン三世の親日政策を背景に、巧妙老練な言動と好意的な献策や助言を通じて、幕府中枢へ急速に接近した。横須賀製鐵所（明治4年から横須賀造船所）建設、三兵演習、六百万弗借款、そして幕府を中心とする、幕藩体制の近代的中央集権国家への改造を意味する六局取建、さらに貿易振興のための商社取建、いずれも小栗の功績とされているが、実は背後にロッシュの入れ知恵と援助があると神長倉は言う。この把握があったから、『ダイヤモンド』連載の「万華鏡」[(7)]で、何事も小栗の功績にしたがるネポチスト蜷川新を、ひどく厳しく批評したのであろう。

第三巻『横須賀製鐵所の巻』は大筋の鍵になる箇所で、神長倉はそれが小栗の着想に出ながら、ロッシュと相談するうちにロッシュの意向に巻き込まれて総計240万弗という予想外の規模の企画に膨張し、確かに本格的な造船所を残したものの、幕府財政の窮迫を招き、その返済のために、これまたロッシュの考えで、生糸専売方式とそのための商社構想を生み出しながら、結局六百万弗借款に繋がって行った経緯を掴み出して見せる。

ここで依拠したのは、栗本鋤雲の遺稿や『横須賀造船史』等、後に書かれた信憑性の高い文献だが、話は小栗が横浜のオリエンタルバンクに来て、帰路栗本と会ったところから始まる。小栗はまず、栗本が翔鶴丸の修理を命ぜられロッシュに頼って巧妙に遂行したことを褒める。ついで小栗は、鍋島家が購入したものの持て余して幕府に献納した機械を思い出し、栗本にそれを使用するための船舶修理工場（横浜製鉄所）設立を計らってくれと頼む。そこで二人はロッシュに知恵を借り行く。これが1864年12月中旬のことだから、ロッシュ着任後10ヵ月経っていない。彼はすでにこれだけの信用を幕府高官から得ていたのである。ロッシュの推薦で若い技師ヴェルニーを招き、彼が誠実有能に建設を進めたので、当時としてはとてつもない規模の本格的な造船所が完成し、それが維新後抵当に取られ明治政府がその解除に一苦労したとかその工場が第二次大戦まで役だったこととかは有名である。神長倉はこれに加えて、ロッシュが膨大な資金返済の

手段として生糸専売を考案し、その利で返済し得ると、出費を危惧する小栗や老中連に説いたことを、新刊の『福沢諭吉伝』を用いて示している。生糸専売は自由貿易を公準とする各国公使の反対で潰れるが、後に六百万弗借款の構想が生まれたのはこの大企画があったためだろうとも加えている。

第四巻「三兵伝習の巻」。三兵伝習とは、幕府陸軍一歩兵・砲兵・騎兵の三軍の武装、編成、訓練をヨーロッパ化する意味で、小栗ら陸軍奉行の案を栗本がロッシュに繋いで、フランスから訓練用の将校下士官を招き、武器・服装・騎馬を導入したものである。この巻では神長倉は、シャノワン、ブリューネら来日した仏軍人それぞれの経歴行末や宛てがわれた女性の容貌性格など、読物として面白い挿話を連ねている[8]が、幕末史として重要なのは、陸軍はフランス指導、海軍はイギリス指導となった経緯である。日本側が陸はフランス海はイギリスが優位とを知らなかったわけではないが、直接にはこれもロッシュの配慮による。ロッシュは、横須賀造船所をフランスが引き受け、陸軍強化も引き受けたのだから、海軍強化まで引き受ければイギリスを怒らせ、日英関係が不安定になると配慮したと言うのである。実際イギリス公使パークスは、フランスが三兵演習を引き受けたのを知って怒り狂ったとあるから、背景となる国力の差は別として、外交官としての両公使の性格や力量にかなり差があったことも判る。神長倉はこの基本線の上で、榎本武揚率いる幕府海軍が、北上の際奇妙に天候に災いされ、逆転を狙った宮古湾での奇襲にも失敗して五稜郭に立て籠り、結局函館戦争で全面敗北したことをかなり詳しく述べている。これ自身神長倉の、勝てば官軍史観批判の一環と見て良いが、そこにブリューネ以下の来日仏軍人十名が幕軍とともに戦ったことを含ませている。ところで神長倉は、この三兵伝習を、幕臣小栗が採った政策としては横須賀造船所建設より上だと評している。通常の理解と逆だが、あるいはこれは巻末尾の、三兵伝習予算の分析が珍しく舌足らずに終わっていて、実はそこに兵士給与の石高制から現金給与制への改革、つまりは秩禄処分の魁[9]となる「近代化」的改革が含まれていたことへの、暗黙の評価を示しているのかも知れない。

第五巻「六百万弗借款の巻」は史料批判の山場である。一つは、通説や官選とも言うべき権威ある史書の源泉になっている資料、特に勝海舟の現した書物に錯覚や歪みが多く、早い話、江戸城開城に関する西郷・勝会談が、高輪の薩摩藩江戸屋敷で行なわれたとされているが、実は田町の薩摩藩蔵屋敷であると、いくつかの資料を重ねて論断する。また、そこへ勝が単独で乗り込んだのではなく山岡鐵舟が同行していたとか、6百万ドル借款の計画は極秘にされていたので公文書の類がなく、幾重もの資料操作を重ねて論証出来るが、借款促進のために訪仏した栗本鋤雲が、終にそのことを明言しなかったとか、当事者の手紙や回顧談は貴重な史料であっても「どうしても自分に都合のいいやうにハンドルを曲げることを免れない」と述べる。これだけでも神長倉史学はシロウト芸ではないと判るが、本題の6百万ドル借款については、これほどの大問題を「混沌曖昧たるままに打ちやらかされてゐる」のは「学界の名誉でもないから」この際真相を明らかにすると振りかぶり、「これから俺に調べた虚によって」辿ると宣言している。

そこで神長倉が示す筋道は極めて明快であって、6百万弗借款はもともとロッシュの着想だが、これで幕府の軍事力を強化し、反抗する長州・薩摩を押さえて、全国に郡県制を敷く、つまり廃

藩置県を行なって幕府主導の中央集権国家を作る構想であり、これに見合う中央政府の構造が、後の巻で述べる六局取建である。この借款が曖昧なままで来たのは、極秘にされたため、存否自体が明かでなかったせいだが、存在した決め手になる史料があるとして、岸川家文書第3号を持ち出す。神長倉の記述のままだと尾佐竹博士によるとしか判らないが、1926年12月刊行の、尾佐竹猛『国際法より観たる幕末外交物語』に紹介された、塩田三郎訳の来信である[10]。神長倉はこれを全文引用した上で、これで借款談は九分通り進捗していたことが判るとしている。因に神長倉が最初にこれを引用したのは、『ダイヤモンド』紙昭和八年十月十一日号(芋作名)だから、尾佐竹の本が現れて七年後である。その間、尾佐竹自身を含めて歴史家がなぜこれを見過ごしていたのか判らない。あるいは勝海舟ら借款反対派が、借款の担保に土地を要求されたと誇大な批判を書き残したために、国辱あるいは危険を感じて分析が敬遠されたのかも知れない。

神長倉は、この借款問題が混沌とする一因は、整理すれば借款談が慶応二年と慶応三年と二度あり、二度とも潰れたが、慶応二年には幕府内部の反対と、借款を必要とする長州征伐が取り止めになったのとで日本側から断わり、慶応三年のそれはフランス側が貸さなかった、(対独関係が緊迫したからという説もあるが)モンブランが薩摩側に即いて策謀し、親薩イギリスもシーボルトらが策謀し、挙って幕府の正統性を貶めたために、幕府の権力としての信認(クレジットワージネス)が失われ、そのため貸し手の中心ソシエテ・ジェネラールが市場で幕府債の信用を得られなかったのだろうと解している。彼の探索によれば、この借款の幕府側の中心は小栗上野介とされているが、実は徳川慶喜側近中最有力な原市之進[11]であり、この有能な人物は、山岡鐵舟一派の幕臣に切られてしまい、ために慶喜は落胆して大政奉還したと言う説もあるほどだという。

横須賀製鉄所の巻で触れたように、この借款の返済も、生糸貿易の独占利益を当てにしていたと神長倉は言う。慶応元年八月、小栗上野介以下勘定奉行連名の「組合商法之儀に付御内慮奉伺候書付」が提出される。これが、日本における商社構想の嚆矢であり、それがロッシュの入れ知恵によることを示している。これまでは慶応三年の「兵庫開港に付商社取建方並御用金見込之儀申上候書付」が、実現した商社第一号の兵庫商社の構想だったため、こちらばかりが知られていたが、実は以前の歴史書も、先行する慶応元年の文書を手探りしていた。神長倉はこの文書を、大塚武松編の川勝家文書の中から—ひょっとすると大塚が気付く前に[12]—見出し、全文引用している。この発見がよほど嬉しかったらしく、初めて引用した『ダイヤモンド』昭和九年一月十一日号で、芋作は、自分のような街頭の歴史家は鶴嘴一つで山に入って行く冒険家のような気持ちで史料を漁っているのだから、「かういふ史料を発見した時には、全く冒険家が金鉱でも掘り当てた時のやうな法悦に打たれる」と書いている。そしてなお、後の書『明治産業発生史』の中では、「恐らく上掲の文書は、川勝家文書の中に介在しているために…同書には、多くの外交関係の文書が収録されている處から、経済史家の目をのがれていたのであらう」[13]と、大塚にむしろ同情的な発言までしている。

使われなかった川勝家文書中の意見具申や岸川家文書中の書簡に着目したのは神長倉真民の功績であろう。こうした発見が出来るのは、彼の博識や敏捷にもよるが、何よりも彼が掴みかけていた幕末史の構図—幕府によるフランス依存の国家近代化の実現可能性—がもたらした慧眼によ

るものであろう。この箇所は、本書中でも全神長倉史学中でも輝かしい成果である。われわれは双方の全文を、先に[14]引用しておいた。

第五巻のこの後は、将軍の弟徳川昭武の訪仏が、旅費としてこの借款の金を当てにしていたのに、一行の中が親仏派と親英派に別れてしまい、それがフランス側の心証を害して、借款が成立しなくなったばかりか旅費にさえ困ったという挿話や、栗本鋤雲の訪仏はこの悪化の修復のためだった、といった経緯の叙述であり、借款問題の終焉を語っている。

第六巻「ロセスとパークスの巻」。この巻の前半は、ロッシュの幕府への食い込みの進行と、慶応元(1865)年夏に着任したイギリス公使パークスの暗躍と両者の角逐を、多くの史料を用いて細かく述べる。内政面では幕府の長州征伐とその放棄があり、薩長連合による反幕勢力が急速に形成されて、幕府の権威が低下して行く時期である。両者の暗躍はそれに絡み、ロッシュの老練巧妙な親幕的路線に対してパークスの粗暴で武力依存の親薩長路線が描き出される。巻の後半は、まさにこの時期の現象だが、新選組による池田屋切込や、維新の志士達とその女性関係といった、講談等大衆芸能で周知の事柄が、細かい史料を踏まえて歴史的に整理しつつ描かれる。ただ読むだけでも楽しい箇所である。

これに対して第七巻「六局取建の巻」は、神長倉が最も力を入れた箇所である。即ち言う。『徳川慶喜公伝』で、慶応二年末にロッシュから新将軍慶喜に秘密の建白が届けられたことが判る。同書ではその中身が失われたことになっているが、栗本鋤雲の『鮑庵十種』や『続徳川実記』で内容が判る。幕府＝幕藩体制の改造意見である。「従来の歴史家はこの事をあまり重く見てゐないが、わしは、この事は、徳川幕府の歴史に於て、実に特筆大書すべき重大事だと思ふ」[15]として、ロッシュの改革案つまり「六局取建案」の全文を掲げる。われわれも神長倉の意気に感じて、叙述をやや細かく追おう。

神長倉が言うに、『続徳川実記』に、ロッシュは、慶応三年二月、大坂城で慶喜と数時間に亘って会談し、途中から人払いをさせて「六局取建」を述べたとある。人払い前の意見も興味深い。私は日本のことを書いた書物を熟読してから赴任した。権現様の思し召しも承知している。だが条約は結んだ以上は履行しなければ、外国がそれを口実に武力干渉したり、別の勢力と結んで国を分裂させたりする。外国の中には日本が四分五裂になることを望むものもあり、目前の私利に因はれず将来の多利を謀るフランスのような国もある。貴方はこのうちどちらに依頼するつもりか。と言ったところで人払いになる。

そこでまず内外の情勢を説く。日本の不利を謀るのがイギリスであり、長州は公然、薩摩は陰で親英である。彼らは、自分は開港したいのだが幕府が禁じているとイギリスを騙している。幕府は思い切って下関、鹿児島の二港を開港し、江戸、大阪の開市は延期すると良い。そうすれば薩摩長州の嘘がバレて幕府は信用を回復する。パークスは幕府が両都開市に違約することを口実に戦争をしようと考えているからこれも躱せる。長州についてはしばらく放置し、幕府が改革によって力を蓄えてから処置すれば良い。

その上での六局取建案。行政組織を、陸軍・海軍・会計・外務・内務・司法の六つ(前年の案では農務があって司法がなかった)に区分し、その担当分野を明確にせよ。会談では六局総裁から始

める。閣老会議は国の大事を定める。各局の担当範囲はその局で定める。会議は毎日開く必要はない。週に何回、月に何回と決めて開けば良い。大君御臨席なら他の閣老同様に議論し、御臨席ない場合は総裁が首長になる。出席者６人だと３対３で評決出来ないから７人が良い。即ち、総裁壹人、海軍壹人、陸軍壹人、外国事務壹人（外国語伝習学校）、会計壹人（貿易、物産、建築）、全国部内壹人、曲直裁判壹名（国学）。各局閣老壹人、参政壹人とし、参政は大名から人を得られない時は、国事を誤るよりは旗本から賢才を選ぶのが良い。

ついで会計局。何よりも年々の予算制度にせよ。各局で年予算を定め、内訳は各局で定めれば良い。会計局は各局の内訳に介入せず、年総計を正せば良い。なお会計局との関連で、商社設立、外国借款にも触れる。そして、家来の俸禄は金銭払いにせよ、石高制を止め、米不足の時には交趾支那から輸入すれば良い。軍備は政府が統一し、各大名が個別に兵を養うのをやめ、経費を大名に負担させれば良い（米輸入は試みられた模様）。この年、役人の俸録が金給になったのも、小栗が旗本に兵賦金を申しつけたのも、この献策に基づくのであろうと神長倉は解している。つぎに大名削小論。大名はおいおい廃止すべきせである。幕府が三万の兵と十五・六艘の軍艦を持てば必ずやれる。これと伏在する郡県制構想とを重ねれば、これは後の廃藩置県である。続いて租税、商人には二分（百分の二）、寺院、土地すべてに課税すべきであると言う。税制については後に新たな献策がなされる。ついで貿易振興、産業開発。これは後の殖産興業だが、貿易については商社―コンペニ―の取建、産業については技師熟練工の招聘を勧める。いずれも具体的な腹案があり、現に来日している個人名を挙げる場合がある。運送改善は利益が大きいから投資をおそれるなとした上で、経費は譜代大名に拠出させろと言う。組織は、閣老壹人、参政壹人、参政は閣老不在時の代理人、貿易建築には奉行四人づつが要る。奉行は各局とも参政の次。

この後の陸軍、海軍、外国事務、内務、司法の五局については、特徴的な議論を拾っておけば済む。陸軍の編成については、歩兵は３大隊から成る１聯隊、散兵１聯隊、騎兵１聯隊、「大砲隊は御国には不用に御座候」。山之大砲隊、軽砲隊の二つは御国には肝要に御座候」。ここの意味は良く判らない。と言うのは、続けて、連れてきたブリュネが武田斐三郎、平井勇造に大砲製造の技術移転をしている、と述べているからである。フランス得意のナポレオン砲の技術までは渡さないと言う意味だろうか。そうならそれは武田が掴んでいたのだが。海軍については、不可欠の製鉄所はわが国が引き受けている。首長はヴェルニー、海軍はわが国は引き受けていないが、シャノワンを首長にしてもらいたい。陸軍の箇所で触れたが、シャノワン「御国を愛する情深」い。そして「極秘に申し上げ候。仏本国の軍艦へ御国冷悧の生徒を載置修業せしめ置かれ候はば」イギリスの伝習期限が切れた時ただちに教師として使えると、あくまで一時譲っただけだとの姿勢を崩さない。その他の、外国事務、内務、司法については特記すべきことはない。

神長倉はこれから後、幕府が実際に改革を始め、各職の人選まで行なったことを述べている。要点のみ拾えば、同じ慶応三年６月に江戸の重役達のロッシュ案に対する質問を提出し改革にとり掛かった模様だが、ロッシュは同年８月28日（太陽暦９月25日）付けで、詳細な再建白を提出した。ここに新たな租税案が含まれるが、地税、酒税、煙草税、茶・生糸税、日本舟の運上を挙げた他、大名の陸軍の半分は江戸に置いて幕府陸軍と同じ訓練を施せ、ヨーロッパで行な

われている法を参考に新たに法を制定し、かっそれを公に周知させよ、各局の官吏の位階俸給を統一せよ、など細かい気配りを示している。これを踏まえて、幕府は、司法を除き、ほとんどロッシュ案そのままの改革案を作った(日付不明)が、実はもっと前のロッシュ建白に基づく改革を、先取り的に実施した部分さえあった。こうした体制内改革が洩れて、志士達を警戒させ、倒幕を急がせた面もあると言う。

著者神長倉はもしこれが実施され効を挙げたら歴史はどうなったろうかと自問し、幕府の基本線は明治維新同様開国だから、泰西の資本主義が流入して、経済も政治も今のような状態になったであろうが、王政復古、天皇親政は容易に行なわれなかったろうと自答してこの巻を閉じている。結論的には私も同意見だが、論拠が異なる。家康を神化しつつ崇めてきた幕府を武力で倒した薩長は、将軍より高度の宗教的正統化を必要とし、そのため、聖性に乏しい神道を代表する天皇を、過度に聖化することで自らの世俗権力を宗教的に権威づけようとした、それが近代日本の不幸である。神長倉自身もそこから脱却出来なかったのではないか。

第8巻「ロセスと慶喜の巻」。この巻の始めは幕府強化財源のための商社構想を取り上げているが、商社については本稿で詳しく論ずるまでもない。この巻の中心はロッシュの行く末で、慶喜が大政奉還したため折角の入れ知恵が無駄になったように見えたが、ロッシュはそれにもめげず、なお幕府を中心とする中央集権政府を作るべく献策を続け、それでも慶喜に江戸逃亡のようなバカな目に会わされながら、なお期待を持ち続け、結局本国召還されて、1868年5月、寂しく日本を離れ、その後の彼は、7月24日にパリで徳川昭武に会いに行った、1901年5月26日、91才で死んだ、としか判らないと言う。もっとも、この巻の「むすび」で神長倉は、慶応三年になると、小栗より慶喜の方がロッシュに惚れ込んでしまって、西周を呼んでフランス語を教授させ、たちまちアルファベから単語、そして連語まで読めるようになったという挿話を付け加えている。

第9巻「カションとシーボルトの巻」。話の流れは、徳川昭武訪仏の際、随行者の間に生じた対立から対仏関係が悪化し、同時期に薩摩―モンブランの暗躍で幕府の信用が失われて、期待した借款が不可能になった。双方の難題処理のために栗本鋤雲が派遣されたが覆水盆に帰らず、その間に大政奉還や幕府の敗戦で結局帰国せざるを得なかった経緯である。表題は仏英双方の有能な通訳間の角逐を示し、彼らが主たる舞台回しを勤める。

メルメ・ド・カションはすでに帰仏していた。本国でロッシュ更迭の動きがあったのを食い止めるためにロッシュが派遣したのだが、カション不在でフランス公使は日本語の話せる世話役を提供出来なかった。その隙を狙って、イギリス公使パークスは巧妙に通訳シーボルトを送り込み、スパイと攪乱工作を行なわせた。このシーボルトは、オランダ商館の医師として来日した生物学者シーボルトの長男だが、英仏独蘭語が出来て日本語もうまいという語学の達人で、その書簡は有用な史料になっている。彼の暗躍で、随員はイギリス・コンペニーとフランス・コンペニーに分裂した。イギリス寄りの訪仏団は、帰国していたカションやフランス政府の感情を害してしまった。もともと幕府の手先として働いていたモンブランが、私利を得られないとみて薩摩方につき、万国博覧会で、幕府は薩摩と同格の大名に過ぎないとフランス世論を誤導した。これを知ったロッ

シュの入れ知恵で、幕府は鋤雲に「国律」を持たせて訪仏させ、シーボルトはその手腕を恐れたが、栗本もカションの反日感情を修復するのが精一杯で、借款は実現しなかった。そのうちに大政奉還や幕府の失権が伝わり、フランスの親日派が兵力軍艦を提供するから薩長と戦えと提案したのを、鋤雲がそれでは日本が英仏の交戦場になると断わり、留学勢を纏めて帰国した。かくて栗本は生き延びたが、帰って見れば親友小栗は斬られていた。神長倉は以上の筋を、シーボルト、栗本らの書簡を主たる史料として描き出す。これ自身かなりの歴史的分析であるが、加えてなお、昭武の随員に頑迷な水戸天狗派が多く、民部公子の指導者に邪教の教法師であるカションを選ぶなど以ての他と息巻き、大使だった向山隼人正もこれに同調したので、徒に幕府を不利に陥れたといった挿話まで加えている。

3. 他の二著について若干

続く『明治産業発生史』と『明治維新財政経済史考』については、ここでは比較的簡単に済ませる。詳論するには別途機会があろう。前著は既稿「補説会社という言葉」[16]への重要な補完として取り上げ、会社の起源を論じた知られざる(私自身も長く知らずにいた)先駆的著書と評価しつつ、全五部中「コンペニー由来噺」を中心に紹介する。後著は人物探索記の末尾[17]に触れておいたように命がけの著書だが、内容は天皇中心史観で汚染され、分析として不完全に終わっている。それゆえこの両著については、本稿で『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』を扱ったほど詳しくは取り上げなくとも良い。そればかりか、学問的意義から見ても、最後の著は最初の作には匹敵しない。

『明治維新財政経済史考』は、個別論点として意義ある箇所は含むが、書全体として先行研究を引き離すほど斬新ではなく、おまけに、ありふれた天皇中心史観—日本的特殊性論—が、戦勝で昂揚したナショナリズムで異様に強化されたため、著者の体力低下と相俟って、肝心の由利財政の機構的分析を摩滅させてしまった失敗作である。

『明治産業発生史』は、これと異なって大きな意義を持つ。「コンペニー由来噺」における「商社」起源発見の独創性ばかりではない。「当世バンク流行」での銀行起源論も捨て難い。あとの鉄道、電信、瓦斯ランプは、物的装置であるため、泰西文物を理解導入し易く、その歴史も書き易くなるが、バンクはコンペニーと並んで人間同士の関係の制度化であるから、当事者による理解も難しく、分析的に書くのも複雑になる。

バンク論における神長倉の主張は、従来銀行史と言えば、日本になかった洋式の制度の設立なので、明治二(1869)年の為替会社設立から始めるのが普通だが、実は幕末に助走期間があり、そこで多くの面で準備がなされていたというものである。既に文久元(1861)年から横浜へ外国銀行の支店が開業し、これら銀行を通じて発行された外国人のチェックやバンクノートが、横文字手形と呼ばれて日本の貿易商人の間で流通していた。また、バンクを銀行と訳したのは、これまで、明治になって国立銀行を創設するに当り、当局者が『華英辞典』[18]から採ったとされて来たが、慶応二年の書簡(岸川家文書第3号)を邦訳するに当たって、塩田三郎が何回か「銀行」を使っている。塩田は仏語も英語もできたから、同じ『華英辞典』から採ったかも知れないが、

日本での用例はこれが最初である。以下、日本人で最初に外国銀行に接触したのはアメリカ彦だとその自伝を引き、幕末の遣外使節団は為替が使えず正金を持参して不自由したとか、福沢諭吉でさえ為替を理解するのに苦労したとか、徳川昭武一行がイングランド銀行を見学して感心したとかの挿話が連ねられる。もっともこれらは、単なる挿話ではなく、日本社会に欧米流の銀行概念が流入する過程の叙述である。ただの挿話と言えば、先のアメリカ彦が横浜で発行していた新聞に1866年恐慌の報道が含まれており、そこに「ヲボラシゴウネと云大ひなる商人戸をしめたる故に町中大にさわぎ」とある由紹介されているが、オーヴァレンド＝ガーニー商会の倒産であろう。同様な音訳不全は、「イカイノメスト」だの「バンクオフエンゲランド」などと出てきて、楽しい読物になっている。

「バンク」からでも察し得ることだが、『明治産業発生史』は、五部全て、幕末編と明治維新編から成っており、その五部で、資本主義経済が生み出した社会的基盤―インフラストラクチャー―の形成過程を考察している。『財界巡礼記』同様、日本の資本主義的発展がいかに早いかを称えながら、特定産業発達史でなく社会的基盤形成史を扱った『明治産業発生史』では、既に幕末にその準備過程があったのだとしている。

この歴史観は興味深い。明治維新は大衆的には御一新だったし、日本資本主義論争では歴史的画期として、それがブルジョア革命であるか否かが争われていた。いずれにせよ歴史が維新で断絶するという理解が主流だった。ところが神長倉は、日本の資本主義経済の出発点は幕末だと捉えたのである。尤も、資本主義経済の実体と云うより、資本主義的社会基盤についての観念や理解が幕末に始まったことを指摘しているのであるが。そしてこの限りでは、彼の歴史図式はさほど先鋭でないとはいえ斬新だと云い得るし、それは天皇中心史観―日本優秀民族説―と接合可能ではあるが、天皇中心史観そのものではない。主題が経済史―社会基盤形成史―であるため、『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』ほど鮮やかに独創的ではないが充分独創的意味を持ち、『明治維新財政経済史考』のような時局迎合作に陥ってはいない。

素朴な天皇中心史観は神長倉にも刷り込まれていた。遡れば、『ダイヤモンド』に蜷川新との論争「万華鏡」[19]を連載した時にも天皇神聖論的語句を振り回し、最後に天皇機関説論者に非難を浴びせていたし、『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』にさえ、天皇神聖説的言辞が紛れ込んでいた[20]。『財界巡礼記』や『明治産業発生史』や『新興コンツエルン物語』の経済書には、天皇中心イデオロギーの露骨な表白は少ないが、その代わり、野郎自大的な日本民族優秀説が、露骨でない形で伏在している。

4. 学界と神長倉真民

神長倉は学者を尊敬してはいなかった。そのことは本章に引いた言辞からでも解かるが、もっと露骨な、学者冷笑や学者揶揄にも事欠かない[21]。有能な在野の人物が、成果が乏しいのに世俗的権威に包まれている学界人に対して、しばしば示す態度である。ただ、神長倉の場合、時代状況の反映で、「学界・学者」にマルクス主義的思考・語彙が含まれていた。逆に学界歴史家の側も、挙って神長倉を軽視した。それも、読んだ上で駄目だと評価したのでなく、ほとんどが読まず名

前さえ知らなかった。既述の人物探索に述べた諸困難は、主として学界歴史家の神長倉無視あるいは無知に由来するものであった。

そうは言っても、神長倉が全く無視されたままだったわけではない。『ダイヤモンド』昭和十年八月一日号の随筆欄で「原生」は、「今回の小栗上野やロセスを書いた書物」を、竹越與三郎、尾佐竹猛博士の如き斯道の権威者は逸早く書を寄せられ氏の労を多とせられた」、殊に尾佐竹氏は『趣味と実益に富み近来獲難き好著と存候、特に正確なる史料を縦横に駆使し、流麗なる行文にて幕末秘史の全貌を明確にせられたるは、学界に於ても新発見として云々』と書いた、と報じている。竹越 (1865 ～ 1950)、尾佐竹 (1880 ～ 1946) とも一世代上の博識の歴史家で、しかも専業歴史学者ではないが、彼等は神長倉の業績を高く評価していたのである。

因にこの「原生」は自らも歴史研究を志し、先輩「神長倉氏」に指導を仰いだところ、まず『日本外史』を読めと教えられたという。『日本外史』は神長倉若年時代からの愛読書だったかもしれない。とすると、神長倉の尊王史観の源泉はこの書だったか[22]。

ところでその後の学界歴史家は、日本資本主義論争に関心を示さない神長倉真民を無視し忘却した。その先駆的代表例が石井孝である。石井は一貫して神長倉に否定的に言及しているが、その最初が、1936 年初発表の連作論文[23]である。これは管見の限り学界歴史家が神長倉の名を挙げた最初であるが、挙げ方が一方ならず捻れている。そもそも石井のこの論文は、大塚武松の労作[24]を乗り越えることを目標に「若干の新史料を追加」し「少しばかり卑見を開陳」したものだが、その際の新史料は明らかに、川勝家文書から神長倉が取上げた、慶応元年八月の「組合商法之儀に付御内慮奉伺候書付」なる商社構想の初出と、岸川家文書中の 6 百万弗借款の証拠となる、塩田三郎訳の書簡 3 である。いずれも神長倉が最初に照明を当て、『仏欄西公使ロセスと小栗上野介』で引いている。この書は 1935 年 6 月発行で、明らかに石井論文より先に出ており、史料初引用なら、岸川家文書は『ダイヤモンド』1933 年 10 月 11 日号、川勝家文書は同誌 1934 年 1 月 11 日号だからもっと早い。この両文書に関する限り、石井は神長倉の後追いをしたに過ぎない。にも拘らず石井は、神長倉が先行したことに全く触れることなく「組合商法取建…」の意見具申については、出所を川勝家文書と注記しただけで全文引用し、塩田三郎訳の岸川家文書書簡 3 については「先に尾佐竹博士が紹介された貴重な史料」と、明らかに神長倉の名を回避した言い回しで紹介し、連作いずれにおいても、本文でなく註の中だけで、石井が神長倉が誤ったと見た論点を非難した。

即ち連作の (一) では、神長倉が「この商社計画の根幹をなした生糸専売案は、外国公使の講義によっておじゃんになった」「従ってまた、商社取建の方も自然に中止となった」と言っているのを捉えて、商社計画が具体化したのは慶応元年八月…英蘭両国代表よりの抗議があったのは…この年二月で、この時商社計画は未だ具体化して居なかった。「従って氏が商社建設計画が外国よりの抗議によって中止となったとするのは明らかに誤謬である」と語気鋭く論難している。二月に諸国公使が抗議した事実は、石井より前に大塚が明らかにしたものだがこの点はひとまず措く。時間的順序が石井の言うとおりだとしても、抗議があったのは生糸専売に対してだから、表現上それを避けた形でやや後に商社計画を持ち出したと解釈することも出来るし、事態が全て

石井の言う通りでも、それで有意の史実解明になったわけではなく、揚げ足取り的批評に過ぎない。これだけで神長倉が駄目だと言える理由、ましてや彼の功績を無視して良い理由にはならない。

連作の(二)で石井は、神長倉氏は「慶応二年借款談は九分通り進捗して居たのが、幕府内部に於ける反対によって中止となったとされて居り、その場合八月中に於て借款が一応成立したと見る可き史料を掲げられ、然る後単に幕府内部に於ける借款反対の空気を示すに過ぎないと見られる七月中の史料を示されただけで、借款は殆ど成立しかけたが破談となったと断言されて居るのは誠に前後顛倒した仕方である」と、ここでも語気鋭く神長倉を論難しているが、神長倉はこの点では、幕府内の反対空気と同時に長州征伐中止を借款停止の理由に挙げていたのだから、石井の論難は理解不充分による粗忽な反対である。仮にここで完全に石井が正しかったとしても、石井自身六局取建に言及しているのだから、神長倉が日仏関係の深化の把握において先駆的図式を示したことは否定出来まい。

石井がなぜ神長倉に対して敵意だけ露骨な扱いをしたのかは分からない。学者のシロウトに対するいわれなき蔑視によるものか、石井の公式左翼的イデオロギーが神長倉排撃を要求したのか、はたまた、石井の個人的性格から、先を越されたことへの嫉妬が強烈だったためか。石井が多くの史料をこなし、緻密な解釈を施して、大きな成果を挙げているだけに、先行説に対するかような扱いは、石井自身の学問的品位を汚すことになっている。

この件は石井の戦後の書『明治維新の国際環境』における神長倉批評に続き、それが金井円「小栗忠順の対英仏借款に関する岸川家伝来文書の再検討」に続いて、神長倉真民がわれわれの前に登場する契機になるのだが、この点は暫く措き、ここでは時間的順序に従って、戦時中に神長倉真民を引用していた学術書に触れておこう。

それは関山直太郎『日本貨幣金融史研究』[25]である。これは私が自分で知っていた文献ではなく、松本司書が検索してくれた結果見出し得たものだが、神長倉の学界における知名度が驚くべく低いので、その名を挙げているだけでも貴重な資料になる。同書は、神長倉真民『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』を二ヵ所で引用し、同時に石井孝の前掲論文も挙げている。ただし、内容的なコメントはなく、先行研究を素直に挙げた、学術的に純真な姿勢の引用である。なお索引に神長倉の名はない。

そこで石井孝『明治維新の国際環境』[26]。これには1957年刊の初版と、1966年刊の増訂版があり、いずれも大部の力作であって、その一章には前掲「幕末に於ける日仏間の経済関係」が下敷きとして使われている。だが、神長倉に対する論評の調子は論文とはかなり異なっている。即ち論評は一ヵ所にとどまり、論点も変わった。岸川家文書中の塩田三郎訳、書簡3号の解釈について石井は言う。「神長倉真民氏は、借款の主体はソシエテ＝ジェネラールであるが、危険分散の意味でオリエンタル＝バンクを仲間にいれたのだろうと想像[27]している。そうした点も考慮されていたかも知れないが、当時フランスは日本に銀行を持たず、金融上の取引はすべて英国の銀行をへなければならなかったので、そうした英国の銀行の妨害を受けないために、日本との借款にあたってもオリエンタル＝バンクを加えたのではあるまいか」と。自らの勇み足を惧

れたのか、語調がずいぶん柔らかくなっているが、巨額の借款に対する共同融資による危険分散は金融取引上の慣行（今日のシンジケートローン）だから、それを知っていた神長倉は当然そう解釈したのだが、その知識の乏しい石井は妙に政治主義的解釈をして疑問を投じた。石井の解釈も絶対に成立不可能だとまでは言えないが、オリエンタル＝バンクの行動から見れば、よほどのことがない限り、窓口としての営業を断ることなど考え難い。やはり石井は無理して神長倉にケチをつけたのであろう。初めのボタンを素直に掛けなかったために、全てのボタンを納められなかった。

出発点における石井の捻れた神長倉論難は、石井自身の功績を汚したばかりか、石井が学界で権威ある存在となったために、戦後の歴史学界に、当然検討対象とすべき説を無視して済ませると言う不幸をもたらしたことになる。

ついで金井円[28]。金井は岸川家文書の尾佐竹以上に正確な判読を示し、史料紹介の一環として、その利用者について「神長倉氏及び石井氏は、とりわけその内邦訳文書を他に得られない典拠として引用している」[29]と並べて名と書を挙げた。神長倉『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』、石井初版『明治維新の国際環境』。ともに尾佐竹の判読のままの利用だから、細部は金井の判読に及ばない。ただ金井は、神長倉について「ジャーナリストとしての神長倉真民氏は、外交関係の国内史料をひろく漁って、ロッシュとの関係をめぐって、通俗的な形をとりつつも鋭い批判と解釈を試みた」[30]と評した。学界歴史家が神長倉を肯定的に評価したのはこれが初めてであろう。金井はなお、塩田三郎訳の書簡３号の「５万ドル」を「５百万ドルと正したのは神長倉氏」と、石井が黙殺した、判読における神長倉の貢献をも明示した[31]。石井の神長倉批評点については、金井は、神長倉は危険分散説、石井はフランスが日本に銀行を持たなかった局面と、両論併記[32]である。ともあれ、金井のこうした高い評価があって初めて、神長倉真民は私のようなシロウトの目の前に登場し得た。石井の否定的引用のままなら、神長倉の名は忘れられたであろう。

以後、神長倉の著書に言及した戦後の研究３点を挙げる。探索不足を惧れるが、今の處、他の人からの情報を含めてこの３点しかない。多々益々弁ず。読者諸賢のご教示を得たい。当面３点しかないことは、これだけの業績がこれしか知られていない証拠にはなる。

著作の刊行順に挙げると、まず、立脇和夫『在日外国銀行史』[33]。これは、幕末政変時に横須賀造船所がフランス政府の手でソシエテ＝ジェネラールに担保に入れられ、明治政府がそれを受け出すために、イギリス公使パークスに頭をさげてオリエンタル＝バンクから高利で50万弗を借りたという一件で、神長倉が『明治維新財政経済史考』で述べていた[34]。立脇氏は他の文献も挙げているが、筋は神長倉に従ったものと見て良い。

つぎが大内力経済学体系『日本経済論上』[35]。神長倉『明治維新財政経済史考』を引いているが、同書で幕末における朝廷の収入が60万石相当だとしている[36]計算が腑に落ちないと細部一点を論評しただけである。これはむしろ大内の博捜を示すものである。

最後が高村直助『明治経済史再考』[37]。「会社」の語源を論ずる中で、高村は淵部徳蔵『欧行日記』を挙げ、この文は神長倉真民『明治産業発生史』中の「コンパニー由来噺」で知ったと、率直に述べている。これでようやく、神長倉の歴史三部作が、諸研究書の中に出揃った。四年ほ

ど前に、主題から言って神長倉真民を引用していそうなものだと探索した学界歴史家の作(第Ⅲ章、註20)に全く出ていなかったので不思議に思っていたが、これでようやく、学界にも神長倉を知る人がいたことが判った。

註

(1) 拙稿「探索・神長倉真民」大東文化大学『経営論集』13号、2007年2月。基本的に完成したのが2006年10月。その後もなお追加情報を集めた。

(2) 馬場宏二『会社という言葉』大東文化大学経営研究所2001年11月。

(3) 例えば竹越与三郎『新日本史』、1891・92年、民友社[岩波文庫版『新日本史上・下』、「維新前史(三)」]。渋沢栄一著『徳川慶喜公伝』1918年、龍門社、第二十三章「将軍宣下」[平凡社東洋文庫98『徳川慶喜公伝3』300～320ページ]。尾佐竹猛『国際法より観たる幕末外交物語』1926年、文化生活研究社。この他で内容・密度とも神長倉著『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』に匹敵するのは、尾佐竹猛『明治維新』中、1943年白楊社[『尾佐竹猛著作集、ゆまに書房、第17巻2006年、第五編第六章「幕仏密約」15～44ページ]であるが、こちらは神長倉の著書より十年近く後の作品である。尾佐竹は私的には神長倉を激賞したらしい(本稿102ページ)のに、著書では神長倉著の先行に触れていない。

(4) 大塚武松「徳川民部公子の渡欧と英仏関係の一考察」『龍門雑誌』511号、1931年4月:同「徳川民部太輔巴里滞在中における日英仏三国関係の一考察」(『明治文化論叢』1934年、一元社):同『幕末の外交』(岩波講座『日本の歴史』1934年):同「仏国公使レオン・ロッシュの政策行動について(一)、(二)」『史学雑誌』第四十六巻第七号、第八号、1935年7月、8月

(5) 三田村鳶魚『江戸生活のうらおもて』1930年、民友社、8ページ。

(6) 好著『古賀謹一郎』2007年、ミネルヴァ書房の著者　小野寺竜太氏が『栗本鋤雲』刊行寸前の由。

(7) 『ダイヤモンド』昭和10年1月11日(1)～3月1日(6)

(8) この面は芋作名で『ダイヤモンド』に連載していた文の方が詳しい。神長倉は著書に纏めるに当たってお楽しみの部分を整理したようである。

(9) 「半知上納」として旗本に兵賦金を課したのはその例であろう。

(10) 尾佐竹猛前掲『国際法より観たる幕末外交物語』「付録二」

(11) この人物についても、小野寺竜太氏が著作を準備中と聞く。

(12) 大塚は1931年発行の『龍門雑誌』511号に載せた前掲論文では、「組合商法之儀に付…」の文書はまだ見つからない、と述べている(同誌41～43ページ)。もっとも、この文を何時書いたかは判らない。

(13) 神長倉『明治産業発生史』151ページ

(14) 拙稿「神長倉歴史学の魅力」大東文化大学『経営論集』第11号、2006年2月

(15) 神長倉『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』328～329ページ

(16) 拙稿「補説　会社という言葉」大東文化大学『経営論集』第5号、2003年2月

(17) 前掲拙稿「探索・神長倉真民」

(18) Robert Morrison, Dictionary of Chinese language, 1822、通常、モリソンの英華辞典として知られ、幕末には日本でも多用された。国会図書館東洋文庫蔵

(19) 『ダイヤモンド』昭和10年3月11日

(20) 例えばロッシュの、「明治天皇は若くて海外知識に乏しいから良く教育すべし」という献策を紹介するに当たっても、わざわざ「申すも虞多いことながら」などと付している。執筆時の言論統制を回避するためだとしても、

これは不可欠の付言だったろうか？

(21) 参照、前掲拙稿「神長倉歴史学の魅力」註 (69)。

(22) 辻善之助によると、頼山陽『日本外史』の史観は「尊王貶覇」である (有朋堂漢文叢書『日本外史』「解題」)。これが神長倉の天皇中心史観を特に強めた原因だったか。

(23) 石井孝、「幕末に於ける日仏経済関係一)、(二)」『歴史学研究』第六巻第一号・第二号、1936 年、1 月、2 月。

(24) 本稿註 (4) 掲示の大塚論文

(25) 関山直太郎、『日本貨幣金融史研究』1943 年、新経済社。同書 66、73 ページに神長倉『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』を挙げている。石井孝上掲論文も並べて挙げてある。

(26) 石井孝『明治維新の国際環境』、1957 年吉川弘文館、『増訂明治維新の国際環境』1966 年。同書 1973 年版では、岸川家文書の判読に関して金井円の労作に依拠している。

(27) この「想像」は石井の無器用な言い換えである。神長倉は「…と思ふ」と書いている (『ロセスと小栗』247 ページ) に過ぎない。むしろ「推測」したとすべきだろう。

(28) 金井円、「小栗上野介の対英仏借款に関する岸川家伝承文書の再検討」、徳川林政史研究所『研究紀要』昭和 45 年度

(29).(30).(31).(32). 出所全て同上論文、註番号順に p.390, p.389, p.392, p.392

(33) 立脇和夫『在日外国銀行史』1987 年、日本評論社 132 ページ、同『明治政府と英国東洋銀行』1992 年、中公新書にも引用あり。

(34) 神長倉真民『明治維新財政経済史考』408 ～ 411 ページ

(35) 大内力経済学大系第七巻『日本経済論上』2000 年、東京大学出版会、124 ページ

(36) 前掲神長倉『明治維新財政経済史考』58 ～ 60 ページ

(37) 高村直助『明治経済史再考』2006 年、ミネルヴァ書房、25 ページ